

旅立ちの季節

(五十年前、一九七三年七月 東京・羽田)

「じゃあ、気を付けてー。戻って来るまでは、道中のよいしょうなってるのか、生きてるのか死んでるのかも全然分らないんだから」

「ああ、今日はわざわざ見送りのまでしてくれてありがとう。何処かの道中の途中から絵葉書でも出すよ」
「うん、待ってるよ」

羽田を発つときには、友人一人からの見送りを受けながら、初の海外への一人旅は、これから先には何が待っていることだろうかとの期待感と同時に、往復の航空チケットと欧州でのユーレイルパスを除いては、現金の持ち合わせは五万田ジャストと云う、殆ど無銭旅行に近い様な長旅なので、一抹の不安感と云うのも多少なりは入り混じっていたものだろう。



朝、八時三十分発の搭乗機はアンカレッジ、ロンドン経由の北回りパリ・オルリー空港行の日航ジャンボ機、ボーイング747。

羽田を発つと、六時間余りで、前日田付二時過ぎのアンカレッジ空港に經由着陸。約二時間後にアンカレッジを発った後には北極上空を經由し、上空の通過時にはアナウンスが流れ、北極通過証明書なるものも戴いた。

いきなり、朝から夜になったり、夜から昼間、夕方になったかと思うと深夜だ。そして、また朝になったりと、田舎へ入る毎に昼夜が入れ替わる様な中でも、田舎が覚める度に、何度も機内食サービスにあり付ける様な気がしてこの幸せ感ではあった。

羽田を発つてからの約一六時間余りでは現地時間の同日夕刻一六時前のロンドン・ヒースロ―空港に到着した。空路途上での一時的には前日田付に戻った時間帯もあったので、到着時には同じ田付を二度迎えた様な気分がしたものだ。

航空券はパリ・オルリー空港迄の往復ではあったが、期間中には、イギリス・ウィズビーチでの農場キャンプへの二週間の参加予定があるので、案内プリントでの日程を確認したところ、四日後には当ロンドン市内からの送迎バスを利用との内容。この際、パリまでの無駄な往復を避け、ロンドン市内観光をしながら時間潰しをしていた方が節約だろうかとの思い付きで急遽パリ・ヒースロ―空港に下った。

コースを出た後にはセントポール寺院に向かい、そこでの見学中には一人連れの日本人女性から声を掛けられた。

「日本人の方ですか？」そこから、ロンドンタワーにはどう行けば良いかとしょひつ。」と。

「私も、この後に向かおうと思ってるので、良かったら、一緒に向かいましょう」
との流れになり、暫くは行動を共にしていたのだが、タワー内でのあちこちを見学し、巡り歩いている内にはいつしか、二人連れともはぐれてしまった。この時代には、一度はぐれてしまつと連絡を取り合う手段が無いので、再会するのもなかなか難しい(涙)

ロンドンタワーで二人とはぐれた後には、タワーブリッジへと歩いている途中で、かなり強い夕立の急襲に見舞われた。

何とか、タイミング良く、橋脚のためとに駆け込んで暫くの難を逃れることが出来た。

夕方には、やはり、コースを捜し歩いて、ケンジントンの目当てのコースにたどり着いたのだが、ベッドが空いてないとのこととで宿泊を断られ、そこから徒歩で約二〇分弱位の他のコースを紹介された。

ロ、ロ、この際の特典とでも云えるだろうか、たまたま、二人連れのドイツ人女性も同タイミングだったので、内心、ウキウキした気分ながら、

「じゃあ、一緒に向かいましょう」といっしょ話しになった。

だが、世の中は、そんなに良い話と云うのは、そう長くは続かないようだ。

直後には、ドイツ人、デンマーク人、スウェーデン人の四人の男性グループが、やはり、同様に宿泊を断られ、結局は同じコースを案内されたので、共に向かうことになったものだった。(涙)

辿り着いた宿泊先はメイディホステル。朝食付き一ポンド丁度だった。



(七月二十一日、土 ロンドン四日目)

午前八時半に起床。

ケンジントンガーデンズ、ウエストミンスター寺院、ビクトリアパーク、ビッグベン、ジエームズパーク、トラファルガー広場、ピカデリーサーカス…等を散策見学。

夜には、日本を出発前からの唯一の宿泊予約として含まれていた筈のプリンセス・スクエアホテル着いたのだが、どうやら、代理店側での不手際があった模様で、予約の話が通じていなかった。

さらに、二ポンド二〇ペンスを支払う羽目になったのは貧乏旅行者にとっては大きな痛手だった。(その分の料金は既に支払い済みだった筈のことなのに…)

代理店側のロンドン事務所側とは何度も電話でのやり取りをしたものの、事務所としてのオープンが来月からになるとの話で、全く機能不全な故でのトラブルだった。

何かと割り切れない様な不愉快なことではあったが、ともあれ、翌日には午後のバスに乗り、ウイスキーの農場キャンプへ向かう予定である。

果たして、明日からは、どんな環境での、どんな生活が待ってることだろう…。妄想を巡らしながらベッドに着へ。

